W in RIDDLE JOKER /新たな世界とアストラルメモリ

変態先輩

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダーＷ、それは風都を悪から守り続けた正義の戦士の都市伝説――――

その片割れ、左翔太郎は八十歳で死亡、フィリップも後を追って自ら死を選んだはずだった――――

だが彼等は何故か小さくなってドライバーとメモリを所持したまま異世界に転生を果たした!!

新たな世界でかつての仲間や新しい仲間と共に、学園生活を送りながら『アストラルメモリ』の謎を追う――――!!

って感じに出来たらいいなって思って始めました。

苦手な方は即ブラウザバックしてね!!

あと一応作者Ｗは全部見たと思うんだけど間違えてたらそこは遠慮なく指摘して下さいｍ（＿＿）ｍ

目　次

プロローグ：Ｗの終わり／新たなる始まり　―――――　1
第一話：Ｗの現状／在原家の人々　―――――　9
第二話：Ｒの苦悩／反抗期少年　―――――　17
第三話・そしてＲは覚醒する／ＥＴＥＲＮＡＬ　ｉｓ　Ｂａｃｋ（？）
1　―――――　22
第四話・そしてＲは覚醒する／ＥＴＥＲＮＡＬ　ｉｓ　Ｂａｃｋ（？）
2　―――――　30

プロローグ：Wの終わり／新たなる始まり

仮面ライダーW、風都を悪から守り続けた都市伝説。
その都市伝説は今――――

プロローグ：Wの終わり／新たなる始まり

「全く??君は本当に最後まで??無茶をしていたね??」

鳴海探偵事務所、その部屋の隅。洋装に似つかない仏壇が置いてあり、その仏壇の遺影には齢８０にも関わらず、昔のテレビに出てくる『ハードボイルド』を体現したかのような服を着た、しかし顔はそれに似合わず柔和な笑みを浮かべている老人、左翔太郎が写っている。

そしてその目の前に座る青年、フィリップ――――本名：園咲来人は呆れたように呟いた。

二人は仮面ライダーWとして、この風都の街を守り続けていた。

しかし、半永久的な不老不死であるフィリップとは違い、左翔太郎は普通の人間であった。

歳を重ねていくにつれ、激しい戦いに身体がついてこなくなった。それは仮面ライダーアクセル、照井竜も同じであり、翔太郎とフィリップは弟子を、アクセルは息子を後継者にし、育て上げた。

そして歳が６０に達した時。彼等は引退した。

二人揃ってかつての敵に妙齢の人物が居たのを思い出し、負けてたまるか!!と言いつつ無茶をしていたのはいい思い出だ。

――――最初は照井竜だった。

彼の場合は警察の激務も加わっていたためなのか、過労のせいか、かなり衰弱しきっていた。定年退職後、彼は家族のために生き続けたが、ある日、まるで糸が切れたように７０でその生涯を終えた。

その次は鳴海??否、照井亜樹子だった。

元より病に侵されていたのだが、照井竜の後を追うように翌年の同じ日に、亡くなっているのが発見されたのだ。
他にも様々な人が亡くなった。超常犯罪対策課の面々やら、風都で毎度のようにお世話になっていた人達。全員が事故や犯罪でもなく寿命で亡くなっていくのを目の当たりにした時、不謹慎ながらもどこか自分達の行いのお陰だと思えて、だけどやっぱり悲しくなった。
そしてついに、翔太郎が死んだ。
病気を患い、通院していたのだが、その病院へ向かうまでの道で、信号無視して突っ込んだ軽自動車から子供を庇い、彼は死亡した。
最後の最後まで風都を守る為に戦った彼らしい死に方だった。
??『歳を取らせるドーパント』と戦った時より彼は衰弱していた筈なのだが、どうして咄嗟に庇えたのか。そこは永遠の謎だ。防犯カメラにもその瞬間が映っていたが、明らかに８０歳の老人とは思えない動きだった。そこだけは本当に謎なのだがそこはどうでもいい。
「??覚悟はしていたけど、本当に独りになると辛いものがあるね??」
そう、もう皆いなくなってしまった。
あの時、自分と一緒に戦った彼らは、一緒に過ごした彼らは。もう誰も――――
「??まあそれも今日で終わりだけどね」
翔太郎から弟子である彼等を任されていたのだが、もう大丈夫だろう、と。四十九日の法要で僕はそう判断した。
??というのは半分、本音は寂しさに耐えられなかったのだ。別に今の環境がダメという訳ではないのだが。
「??やはり君がいないと寂しいものだね、翔太郎」
どどのつまりはそういう事だった。
「後のことは全部この手帳に書いたし??これでもう大丈夫だろう??」
そう言って彼は鳴海探偵事務所を出て、風都タワーのてっぺんまで登り、街を見渡す。
「??本当に色んなことがあった??」
彼は思い出す。
翔太郎と鳴海荘吉に助けられ、Ｗが生まれた日を。

時にぶつかり合いながら、翔太郎達と事件を解決した日々を。
ミュージアムや財団Xとの死闘を。
自分が一回消滅した、最後の変身の時を。
その後姉である園咲若菜が身体をくれ、復活したこと。
他の仮面ライダー達と共闘し、事件を解決に導いたりした事を。
大道克己こと、仮面ライダーエターナルの起こした風都を未曾有の大混乱に叩き落とした大事件を。
照井竜と鳴海亜樹子の結婚式の時の事件を。
謎の女、ときめを中心に巻き起こった戦いを。
「??戦ってばかりだな??」
――――だが、どれもこれもかけがえのない思い出だ。
「さて??感傷に浸るのはここまでだ??今行くよ、翔太郎」
そう言って彼は目を瞑り、自らの身体を分解した。

こうして、風都を守り続けた仮面ライダーは次の世代へと力を託し、この世界から消えた。

「??どこだここは?」
次にフィリップが目を覚ましたのは廃工場だった。
「おかしい??僕は死んだはず??」

まさか、こんな廃工場があの世とは言うまい。
まず周りを見渡すと、自分の周りに色々と落ちているものがあった。まず自分が検索の時に集中力を上げるために持っていた白紙の本。そして――――
「??これは??ぼくが使っていたメモリ?」
サイクロン、ルナ、ヒートの三つのメモリだった。どうやらファングとエクストリームは無いようだ。
「まあ、どの道ぼくはロストドライバーが無いと変身出来ないからあまり意味は無いか??とりあえず懐に入れておこう」
さて、まずここは何処なのか。何故死んだはずの自分がこんな廃工場に居るのか。
「やれやれ、わからない事だらけだな??『本棚』があるとはいえキーワードを絞り込まないと検索もできない」
せめて現在地がわかるような??例えばそう、この工場の正式な名前などが分かれば良いのだが??
「そんなものが都合よくあるわけもない??か。仕方ない」
そう言ってフィリップは探索を開始しようと思い、一先ずこの部屋から出ようと扉に手をかけ――――
「ったく、何処なんだよここは??」
ようとした瞬間ガチャリ、と先に扉が開いた。
「え――――」
「あ――――」
忘れるはずもない、何年も何十年も一緒に運命を共にした。多少幼くなっていてもそれは間違いなく――――
「翔太郎??」
「フィリップ??だよな?」

「????成程、お前も死んだらここに居たのか」
「ということは翔太郎もかい？」
「ああ、それもあいつらに託したメモリも全部あるぜ、ダブルドライバーもロストドライバーもある。取り敢えずWには変身できるな??この体格で出来るのかは分からないが??」
「それに関しては問題ないだろう。直接使わなければ問題ないはずだ。まあ、変身する機会があるのか、という疑問はあるけどね」
　たまたま遭遇した二人はその場に座り情報交換をした、がめぼしい情報はなかった。
「にしても、俺ら今何歳なんだ???」
「わからない。が、ぼくの見た目から推測すると『泉』に落ちた直後って感じだろうね??となると小学生くらいかな？」
「??本当に変身できるのか怪しいじゃねえか??」
「まあ確かに怪しいが??何十年も変身してたんだ、奇跡くらい信じたって??」
「お前がそういう事言うって相当可能性が少ない事態なんじゃねえか???」
「まあ、これがドーパントの攻撃とは考えにくい。幼児化させる能力を持つメモリならありえない話では無いけど、だったら死んだぼく達が生きているのはおかしいだろう」
「確かに??でもそうなるとなんで俺達はこんな所にいるんだ???しかもこんなにちんちくりんになって??」
「流石に情報が足りなすぎる??一先ずここから出て、最寄りの警察署とかにでも駆け込む他ないだろう。」
「ま、そうだな。いつまでもここで話してる訳にもいかねえし??一先ずこの工場から出ないとな」
　そう言って翔太郎は立ち上がり、またフィリップも同じように立ち上がり歩き始めた。

「ま、のんびり行こうぜ、ドーパントの攻撃だって可能性が低い以上割かしどうにかなるだろ!!」
「翔太郎??約五十年ほど前に検索したのだが、それを一般的に『フラグ』と言うらしいよ?」
「フラグ?」
「ああ、こういう時に限ってその手の言葉を吐くと何かしらアクシデントに巻き込まれて最悪の場合死ぬという??」
やけに神妙な顔つきで語るフィリップを見て、思わず翔太郎は笑いながら――――
「ははは、そんなもん創作物の中だけだろ?気にしすぎな――――」

ドガァァァァン!!

そこまで翔太郎が口に出した瞬間、自分達の後ろが爆ぜ――――
「がは??っ!!」
爆ぜた時に空いた穴からボロボロの茶髪のおっさんが飛んできて地面に叩きつけられ、
「グハハハハ!!なんだか知らんが気分がいい!!最高にハイって奴だぜ!!」
さらに、その穴からドーパントが出てきた。
「??????????????」
「??????????????」
「あん?何だこのガキ共??」
「翔太郎、何か言うことは?」
「??すまん相棒、お前の言う通りだった??」
ドーパントを目の前にしてどこか抜けた会話をする翔太郎とフィ

リップ。それを見ていた、先程吹き飛ばされたおっさんが叫ぶ。
「おい！なんでこんな所に子供が??早く逃げろ!!危険だ!!」
「??確かに、アンタの言うことは正しい??だが??」
「子供になったとはいえこっちに賭けた方が生存率的には高いと思うよ、翔太郎」
そう言いながら翔太郎は慣れた手つきでダブルドライバーを腰にセットする。するとフィリップの腰にも同じドライバーが出現した。
「な??」
「あん？何だそれは？」
「見たらわかるさ??さぁ、いくぞ相棒、二十年ぶりの変身だ??」
「この体格、年齢でできるかどうか??だがやるしかないね??まあおじいちゃんになっても何だかんだ変身できたから大丈夫だとは思うけど??」
不安そうな言葉を吐くフィリップだが、それとは対照的に口元には笑みが浮かんでいた。
まるで、必ず出来ると確信しているような、そんな不敵な笑み――

――

「あ、おっさん。フィリップ??こいつの身体頼むわ。持って安全な場所に逃げてくれ」
「は？か、身体？」
そして彼らは懐から長年使ってきたメモリを取り出し、見せびらかす様に構え――――メモリを軽く押す。
『サイクロン！』
『ジョーカー！』
「「変身!!」」

その掛け声と共に、フィリップはドライバーの右側にサイクロンメモリを挿入。するとメモリは翔太郎のドライバーに転送された。その瞬間、フィリップは意識を失い倒れる。転送されたメモリを翔太郎がさらに押し込み、続いて自分のジョーカーメモリをもう片方に挿入。そのまま手をクロスさせ、ドライバーを開いた。

『サイクロン！ジョーカー！』
もう一度メモリの名がコールされたかと思うと、次の瞬間軽快な音楽が鳴り響く、と同時に翔太郎の身体が破片のような物に覆われていく。
そして音楽が終わった頃、そこには身体の中心のセントラルパーテーションを境に、右側が緑、左が黒で、まるで昆虫をモチーフにしたような眼をした戦士。
「なんだお前はぁ!?」
ドーパントの問いに彼は??否、彼等はこう答えた。
『「俺／僕達は仮面ライダーW」』
「仮面??」
「ライダーだぁ？」
『どうやら変身に問題は無いみたいだね、翔太郎』
「まあ前に俺がヨボヨボでも変身できたし、片方に力が偏ってなければ問題なく動けるとも思ってたぜ」
試しに、と軽いジャブをする二人。どうやら特に問題は無いようだ。
『さて??二十年ぶりの戦闘だが、決めゼリフ、忘れてないだろうね？』
「当たり前だ、街を泣かせる悪党共に何十年も問いかけ続けてきた、あの言葉――――」
『「さぁ、お前の罪を数えろ！」』

第一話：Wの現状／在原家の人々

自分は夢を見ているのだろうか。
と、在原隆之介は今日の出来事を振り返る。
仕事でターゲットを追い詰めた、そこまでは良かった。
だが――――
「ちっ??もうこれを使って!!??」
『エクスプロージョン』
そう言って大きめの赤いＵＳＢメモリを懐から出し、腕に挿した。
すると、突然身体が炎に包まれ、そこには人間ではなく、全身から赤い粉のようなものを撒き散らしている化け物（ドーパント）が佇んでいた。
化け物から思わず距離を取り、仲間に連絡を取ろうと通信機に手を伸ばした瞬間、なんの前触れも無しに自分の周りが大きな音を立て爆発した。
そして飛ばされた工場の部屋の中に、小学生位の少年二人がいて――――

「『さあ、お前の罪を数えろ!!』」
その少年達の片割れが気絶し、もう片方が中心から真っ二つに緑と黒に別れた、ガタイのいい戦士――――曰く、仮面ライダーＷとなって、化け物に向かって走り出した。
急接近したＷに反応出来ずに化け物はＷの猛攻を受けて、赤い粉を撒き散らしながら工場の外まで飛ばされる。
――――その光景を見た彼は考えるのをやめ、とりあえず仲間に状況報告をするしか無かった。

一方、ドーパントを外に蹴りで飛ばした翔太郎達は手をパキパキと鳴らしながらドーパントを飛ばした方を見つめていた。
「つし、鈍ってはねえみたいだな」
『僕達が子供になっている事による弊害は無いようだ??良くてパワーダウン、最悪変身出来ない可能性があったが杞憂だったようだね。それよりも翔太郎、ジョーカーをメタルに変えるよ』
「ん?りょーかい」
そう言うとメタルメモリを取り出し、ジョーカーメモリを取り外し、メタルメモリのボタンを押す。
『メタル!』
『サイクロン!メタル!』

するとWの左側が銀色のメタリックなボディに変わり、メタルサイドの背中にメタルシャフトという棒状の武器を背負った『仮面ライダーW：サイクロンメタル』に変化した。
『翔太郎、すぐに周りに漂っている赤い粉を吹き飛ばすんだ、これは敵から生成されていると見て間違いない』
『なっ!?させるか貴様ァ!!』
直ぐに体勢を立て直したドーパントは手をこちらに翳　　し、直径５ｃｍ程の火の玉を発射した。
すぐさまメタルシャフトを振るい、Wを中心に風を起こし赤い粉を吹き飛ばす。強風によってその粉はWの周りから吹き飛び、一部がドーパントへ向かう。至近距離でドーパントの放った火の玉が粉に触れた瞬間――――

目を思わず覆うほどの閃光と轟音が鳴り響き、周囲が炎に包まれた。
『ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?』
「うぉおおおおおおおおおお!?」
モロに喰らったドーパントは至近距離で爆発を受け、悲鳴をあげながら吹き飛ばされ、翔太郎も想像以上の爆発に絶叫した。そんな中

『やはりか』とフィリップが言う。
『うん、どこかで見たことがあると思えば約四十年前に戦ったことがある『エクスプロージョン』のメモリ??つまり爆発の記憶だ。気候や天候に左右されずに、体から出している赤い粉を着火させれば問答無用で強力な粉塵爆発を起こす??中々強力なメモリだが一度戦っているなら対処法なんていくらでも思いつくさ。翔太郎、目は平気かい？』
「ああ、まだ軽くチカチカするが大丈夫だ」
『そうか、それじゃあメモリブレイクだ！』
「オーケー、仕留めるぜ!!」
そう言って翔太郎はメタルの代わりにジョーカーメモリを改めて挿し直し、サイクロンジョーカーに変身、その後直ぐにジョーカーメモリを抜き取り、サイドのホルダーに挿入。
『ジョーカー　マキシマムドライブ』
その機械音声が流れた途端、Wが風を起こしながら空中へ浮かび、完全に静止した瞬間真っ二つに分裂した。そして――
「『ジョーカーエクストリーム！』」
二人の掛け声と共に、初めに翔太郎が、時間差でフィリップが、エクスプロージョンドーパントに蹴りをいれた。
『クソがァァァァァァァ!!』
実に１０ｔを超える蹴りを喰らったドーパントは為す術もなく、絶叫し、爆発した。
Wが無事着地し、ドーパントのいた方向を振り返るとまだ煙に覆われていた。その煙の中から無精髭を生やした人相の悪い男が這いずりメモリに向かって譫言を言いながら手を伸ばす。
「ふざけるな??万能の小箱なんだろ??!!何十万したと思ってるんだ??!!俺はまだ??」
だがその願い虚しく、メモリは目の前で砕け散る。男はそれを見て諦めたのか、はたまた絶望したのか。項垂れ、メモリブレイクのダメージもあり気絶した。
在原隆之介はフィリップの身体を背負い、それを呆然と見つめなが

らも「ターゲット確保、子供を保護」と仲間に連絡していた。

「――――以上が、ガイアメモリとドーパント。そしてぼく達の現状です」

「反応無し、全て事実のようです」

「????まじかぁ????」

エクスプロージョンドーパントを倒した次の日。

昨日吹っ飛んできたオッサン――――在原隆之介が所属していた『情報局特別班』。通称『特班』。

??恐らく特殊な組織なのだろう。『超常犯罪捜査課』に似通った空気を感じる。

昨夜、子供の状態で変身したせいなのか、それとも昔よりも疲れて気がついたら翌日の昼だった。当然の如く俺達のことは調べられたみたいで――――

どうやら俺達の戸籍はないらしい

序にさっき話した俺達の過去の話を聞かせたが風都という街はないらしい。

更には俺達の世界には無かった『アストラル』という不思議パワーがあるらしい。簡単に片付けると超能力。そんな人間が相当数居るようだ。あっちにも『ハイドープ』と呼ばれる能力者は居たが、あれはガイアメモリありきのものなので数はそこまで多くない。

これで完全に俺達は別世界に来たことが証明されてしまった。

フィリップ曰く――――

「これはあれだね、一時期爆発的に流行った所謂『異世界転生モノ』っ

てやつだ。まず翔太郎がトラックに撥ねられたのでフラグは――――

等と長々と語られたがカットである。

そこからフィリップがアストラルについて検索しまくって――――

―気がついたら夕方だった。

「??で、整理すると??そのドーパントに対抗出来るのは現状お前らだけ」

「まあ??現状はそうですね」

「更に言うなら、こんなのが高値とはいえど、大量に出回ってる」

「この世界でどうかはわかりませんが??まあ昨日の犯人がただのチンピラだった辺りそうなのでしょう」

「???まじかぁ???」

と在原隆之介は頭を抱えて唸り始めた。

「最近アストラルでも説明がつかない事件って大体これが関係してる可能性がありそうだけど??いくら特班とはいえ小学生を働かせるのは??」

「小学生じゃねえよ、８０歳だ!!」

「それはそれで問題あるだろ!!」

――――閑話休題――――

「??ま、まぁいい??取り敢えずお前らの待遇???処分??ではないし??なんて言ったらいいかわからないけど??取り敢えず家に養子という形で衣食住を提供する代わりにドーパント絡みの事件になりそうだったら出動、自体を収束してもらう??って事でいいか？」

「願ったり叶ったりだね、翔太郎??ただ一つを除いて??」

「??８０歳超えてから小学校通う事になるのか??新しく作った戸籍上とはいえ??」

爺になってから小学校に再び通うという、一体何があったらどうしてこうなるのか。

「??うん、それはまあ置いとくぞ、それでだな、俺の家なんだが??」

「なんだ？一人暮らし果てしなく汚かったりするのか？」

「俺はちゃんと整理整頓出来るわ!!そうじゃなくてな??さっきこの世

界の説明をした時に『アストラル使い』について話しただろう？」
「ああ??確か『アストラル』って不思議粒子を使える人間の事だったよな」
『アストラル』とは、人の脳とリンクし脳波と連動することによって特殊なエネルギー――――所謂『超能力』を使える人間。それが『アストラル使い』だ。
「説明してなかったが??アストラル使いがあまりいい目で見られない、というのはさっき話しただろ？使えない人間からしたら不気味なんだろうが??とにかくそれで子供を捨てたりとかがあるわけで??ほっとけなくてその訳アリの子供二人、俺の子供として暮らしてるわけなんだが??」
「成程、仕事の際には面倒を見て欲しいという訳か、確かに昨日はともかく普段は僕が戦う場に居合わせるのは殆どないからね」
「ああ、頼む??やっぱり人生経験豊富だと任せられるな」
――――言えなかった。今更言えるはずがなかった。
左翔太郎とフィリップは生涯独身で、子育てなどした事がない、と。
「??取り敢えず後で子育て――――恐らく今の僕らと同じか年下の扱いについて検索しておくよ」
「??頼むわ??」

「今日から世話になる左翔太郎だ」
そう言って彼はいつもの様にハードボイルドを気取ってカッコつけた。
「なんだお前ナルシストか？それとも中二病か？」
少し生意気な物言いだが、そんな自己紹介をしたらこうなる予感はしていた。
「ンだとゴルァ!!」

確かに彼にとっては大切なのだが、８０歳の老人がそれでいいのか??いや、老人だからキレやすいのか???

ただもう少し大人になって欲しいものである。

「おいコラ!!初対面の人間にそれは無いだろ!!それにこれからは苗字が違っても家族になるんだ!!ちゃんと挨拶しろ!!」

「は!?また拾ってきたのかよ!?この間あのちんちくりん拾ってきたばかりじゃねえか!!ほぼ毎晩『子育てって難しいな??』って一人ブツブツ言ってるのにこれ以上増やして??何も学んでないじゃねえか!?」

「うぐ??し、仕方ねえだろ!!訳アリなんだから!!」

育ての親に対してその言葉遣いとは??照井竜の所だったら拳骨待ったなしだ??しかしこの子供、やたらと痛いところを突くのが上手いな。

――――と、フィリップは客観的に後ろから見ていた。

特班のアジトから車で約三十分ほど。そこが在原隆之介の自宅で、その間に二人の子供の話は全て聞いた。

一人目――――在原暁。脳のリミッターを自分で解除し、身体能力を高めたりする事が出来るアストラル使い。とある施設で荒れていた彼を引き取ったらしい。言葉遣いが荒く、悪い人間――――要するにチンピラ等を見つけたら容赦なく喧嘩をふっかけるらしい。が、逆に言えばそれは『弱き者を助けている』。だから根は悪い奴ではない??とは在原隆之介の談。

なるほど、確かに嫌な予感は的中したようだ。翔太郎とは中々相性が悪い方かもしれない。

??これは自分がかなり苦労しなければならないのではないか、と頭を抑えつつ、自分も自己紹介をする。

「初めまして、園咲来人だ。今日から君の父親、在原隆之介が里親として引き取ってくれてね。翔太郎共々よろしく頼むよ」

「ふーん??」

「だから自己紹介くらいしろと!!」

「はいはい??在原暁だ」

「お前な??はぁ??」

全てを諦めたかのように彼は項垂れ、「まあ上がってくれ」と促し、中に入る。
ごく普通の一軒家で、リビングにはテレビとＤＶＤデッキ、ソファにテーブルと本当に一般的な作りとなっている。
「あ、トイレは何処なんだ？隆之介さん」
「トイレは廊下を出て右だ??あとこれからは家族だからお父さんとかせめて親父と??」
「さすがに勘弁してくれ」
翔太郎は即答して廊下に出ようとドアノブに手をかけようとした。
その時、翔太郎が触れる前にドアが開き、金髪の少女が翔太郎とぶつかった。
「きゃっ??」
「うぉ??っと、大丈夫か？」
咄嗟に翔太郎は少女を倒れる前に腕を掴む形でどうにか助けた。だが――――
「ひっ??だ、誰??!?」
「え、ちょ??」
それが彼女の何を刺激したのかはわからない。だが彼女は涙目になり、キッチンへ逃げてしまった。
その顔にはハッキリと恐怖の表情が見て取れて――――
「??前途多難とはまさにこの事だね??」
頭を抱えて、フィリップはそう呟いた。

「これじゃあ落ち着いて検索も出来ないじゃないか」

第二話：Rの苦悩／反抗期少年

在原家にあの二人が来てから一週間。その間にあのガイアメモリという物を使った犯罪が既に三件以上確認され、その全てを翔太郎とフィリップが解決していた。

「??本当はあっちゃならねえんだけどな、中身が大人だからって子供にこんな事させるのは??」

だがしかし、警察や俺達特班もなにも出来ないのが現状だ。特に警察はアストラルを使用した事件ですら完璧な法整備はまだだというのに『アストラルよりも強い真の化け物が現れた』という事実に理解が追いついていないのだ。

「??何とかしてあの変身ベルトを作ってもらって俺が使えたら良いんだけどな??」

そんなことをボヤきながら、今日も在原隆之介は翔太郎とフィリップに事件の概要を伝えに行った。

第二話：Rの苦悩／反抗期少年

在原暁は宛もなく外を歩いていた。元々隆之介とも七海とも上手くいってなかった彼は更に追加された居候とも上手くいかず、自分の居場所が無いように感じ、最早一日の大半を外で過ごすようになっていた。

勿論、在原暁に非が無いわけでは無い。家族といざこざ（いざこざと言い表していいのかは知らないが）があったフィリップは家族に暴言を吐く在原暁に度々注意するのは当たり前の事だし、ハードボイルドを目指し日々を過ごした翔太郎にとっては女の子に暴言を吐くなど以ての外だ、と注意していた。

在原暁も頭が悪い訳では無いから解っている、「自分が悪い所もあ

る」と。だが彼はどうしても素直に聞き入れることが出来なかった――

「??同い年のくせに上から偉そうに説教しやがって??すげえ腹立つ」

ある意味当然といえば当然だった。何が不満か、それは同年代の二人がまるで親の説教のように叱ってくるということである。要するに子供扱いだ。

忘れているかもしれないが??翔太郎もフィリップも中身は確かに８０代だが今の見た目は暁と変わらないのである。ところが彼等はそれを忘れて弟子達に接するかのように説教をしていた。そして暁と七海には８０代を明かしていない。

子供が他人を子供扱いしながら叱る、そんな奇妙な状況が、そんな偉そうな２人が何よりも嫌いになるのに時間はかからなかった。

そんなこんなで、モヤモヤした感情を抱きながら、苛立ちを振りまきながら街を徘徊していた。――その時だった。

自分の視界の端にとある光景が飛び込んできた。年齢は２０代くらいだろうか?それくらいの男性が、黒髪の??大体年齢は自分と同じくらいの女の子に絡んでいた。

この時、彼はこう思った。

『丁度いい憂さ晴らしが出来そうだ』と。

彼は前々から理解していた。『ただ暴れるよりは、世間的に見て悪役を殴った方がまだ言い訳ができる』という事を。

施設時代からそうだった彼は、顔だけは不満そうにしながらも久々に暴れられる事に歓喜しながら、その争いに身を投じた。

――それが彼の人生を決定づけることを知らずに。

「??脅迫状?」
　ところ変わって特班の一室。今日も今日とて検索に身を投じていたフィリップと世界が前世よりも未来すぎてタイプライターが殆ど現存していないことに絶望し、不貞寝している翔太郎を叩き起したのは隆之介が持ってきたガイアメモリ絡みの可能性がある事件だ。??なのだが。
「??脅迫状が送られてきただけなのにガイアメモリ絡みなのか?」
「ああ、その可能性が高い」
　詳しく聞くところによると、今朝、警察庁長官の二条院羽京の自宅に脅迫状が届いたらしい。その内容は至極単純『孫娘を誘拐してやる』との事だったのだが――――問題はその脅迫状を届けに来た人間だった。
「それがコイツだ。コイツが自宅の監視カメラに映っていたそうだ??だから特班に仕事を回したらしい」
　そこに映っていたのは??黄色に光る軟体動物の様な見た目の化け物――――
「おい、フィリップ!!これって??」
「あぁ、間違いない??ルナドーパントだ??だけどまだ彼等だと決めつけるのは??」
「んで、ここからが本題なんだよそこな二人」
　思考の海に入り込みそうな二人を無理矢理制し、隆之介は机の上にとある書類を置く。
「??お前ら心当たりある?って聞くまでもなさそうだな??」
　それは一枚の脅迫状。『娘を誘拐する　我らに不可能はない、万能の小箱とそれを操る無敵の傭兵が居る、誰にも止めることはできない!!』と新聞記事の切り抜きだけで作った、何の変哲もない脅迫状のその下に、やけに綺麗な字でこう書かれていた。
『仮面ライダーWによろしく。

さあ、地獄を楽しみな!!』

嘗て通っていた小学校に上級生を送る会というものがあった。その記憶はほとんど無い、クラスで腫れ物のように扱われていた自分は特に何も思い出がないからだ。しかし、五年生の物語の1フレーズが今、唐突に頭をよぎった。

『こういう時どんな顔したらいいか分からないの』

『笑えばいいと思うよ』

「??いや笑えねえんだけど?」

ポカリを飲みながらボヤく暁のその目の前で――――

「だから!!この子は私を助けてくれたんだ!!そう言っているだろう!!なのになんで連れていこうとするんだ!!私の将軍様に無礼を働くな!!」

(??やばい、なんか知らないけどあの女やばい)

もしかして自分は相当やばい地雷を踏み抜いてしまったのでは無いか?そんな事を考えていると彼女を囲っていたボディーガードの一人であろうスキンヘッドのガタイのいい男がマックの袋を持ち俺の隣に座ると、袋の中からハンバーガーを取り出し「ビッグマック??食うか?ポテトもあるぞ、飲み物はオレンジジュースだが??アレルギーとか大丈夫か?」と聞いてきた。

流石に悪いと思ったのだがこのままあの少女とその他大人大勢の激しい舌戦は終わりそうもなかったので遠慮なくいただくことにした。

しばらくオッサンと二人、公園の隅で黙々とビッグマックを食べて

いると、今まで黙っていたオッサンが口を開いた。
「??すまんな、お嬢を助けて貰ったにも関わらずこんな待遇になった挙句に時間を取らせちまって」
「??別に、オッサンのせいじゃないだろ、寧ろオッサン達１０人体制で護衛してるようなヤツがこんな騒ぎに巻き込まれた??なんて事実がある以上仕方ないだろ。それに俺だってアストラル使いだ。いくらアイツを助けたって化け物を警戒するのも無理はないさ」
　嘘である。正直あまりいい気分がしてないし何なら最初全員ぶちのめしてやろうかとも思っていた。
　だが２ｍ近い身長の、明らかに見た目が堅気じゃないオッサンをさすがに倒せるとは思わなかったし、その直後さっきの女が
『君が??私の将軍様なのだな!!??いや皆まで言わなくてもわかる!!私を探してくださっていたのだろう!?』
　等とやばい発言を繰り返すので大人しくしたのである。まさか憂さ晴らしの為とも言えずそのままなすがままに従っていたのだが??俺と話をする為に彼女と引き離そうとしたら『私の将軍様に何をする!!』と　言い始め??今に至る。ていうか本当に何者なんだあいつは。
「??ところで坊主、名前はなんて言うんだ?」
「??すまん、言いたくない??というかあいつに聞かれたくない」
「??俺が悪かった??まあいい、坊主。取り敢えずお前は無罪放免で釈放だ、誘拐犯じゃないって証明されたからな。隙を作ってやるからお前はお嬢から逃げるといい」
「そうか??取り敢えず誘拐犯として疑われなくてよかった??あと後者に関してはまじで宜しく頼む??って誘拐?」
「??すまん、今のは聞かなかったことにしてくれ」
　??大丈夫なのだろうか、このボディーガード達

「ほんっとに不用心ねぇ～犯行予告が出たばかりなのに外出するなんて」

第三話：そしてＲは覚醒する／ＥＴＥＲＮＡＬ　ｉｓ　Ｂａｃｋ（？）１

「ほんっとに不用心ねぇ～犯行予告が出たばかりなのに外出するなんて」

後ろからその言葉が聞こえた瞬間、真っ先に反応したのは隣に居たボディーガードのおっさんだった。

すぐさま振り向き、徐に食いかけのビッグマックを顔面目掛けて投げつけ、懐から銃を出し、臨戦態勢になる。

が、しかし。

『ルナ』

メモリのボタンを押し、そのまま額に差し込むと、男は黄色のイカのような見た目の化け物に変化した。

「??あのメモリ??翔太郎達が持ってるやつと似てる???」

そんなことを呟いている間におっさんは多少怯みつつも化け物に対する攻撃を開始する。

拳銃を懐から出し、連射するが化け物には応えていないのか怯むことなく進んでゆく。そして――――

「まったく、乙女の顔にハンバーガー投げるとかどういう神経してるのよ！」

スパァン！と触手のような腕でビンタした。

「???ええ????」

「乙女って??お前男だったろうがァ!!」

「誘拐犯とかそれ以前にお嬢に近づけさせるな!!あいつはヤバい!!色

んな意味で!!」
ビンタで吹っ飛ばされたおっさんを見て??と言うよりかは主に乙女発言で顔面を青くしているようだった。
それでいいのか。
何はともあれ、そのまま戦闘に入った彼等を後目に、自分は出来ることをやるだけだ。??気は恐ろしく進まないが――――
「女!!捕まれ!!」
「え!?」

自分のアストラルを最大限に解放し、女を無理矢理横抱きにして、全力逃走。
「しょ、将軍様??」
「黙ってろ舌噛むぞ!!」
「は、はいっ!!」
??なんかもう別の所から危機が迫ってる気がするが気にしない。
「あらあら、面白いことを言うのね?アタシから逃げられると思ってるのかしらっ!?」
ルナドーパントは素早くＳＰを触手で薙ぎ払うとその触手を暁達に向かって伸ばすが――――
「その程度なら当たらねえよ!!」
「なっ!?
??!?」
当たらない。当たらないというよりは、避けられる。
暁はルナドーパントの後ろからの攻撃を見ること無く避けているのだ。
在原暁のアストラル能力は『脳のコントロール』である。
人間という生物は自身の力で身を滅ぼさないよう、常にセーブをかけているとされている。
それを操ることが出来るのだ。それは色んなものを強化してくれる。
身体能力はあくまでその副産物。その気になればそう、聴覚や触覚も、強化できるのである。

暁は触手が迫り来る瞬間聞こえる空気の音を頼りに避けているのだ。
「なんて子なのかしら??」
ルナドーパントは素直に感心していた。
未知の存在を見ても冷静さを失わず、実力の差を感じ取り、自分が出来ることを即座にやる。
「子供がそんな判断をできるなんてちょっと生意気っぽいけど??嫌いじゃないわ!!」
「くそったれ??なんか寒気するしまだ諦められてないし??」
はっきり言って状況は最悪である。こっちはただ逃げることしか出来ない。リーチが違いすぎて気も抜けない。
ただ、唯一つけ入る隙があるとすれば――――
(相手は恐らく、まだ本気ではない)
無意識なのか、態となのかは別として。あんな化け物からここまで逃げきれているというのがそもそも可笑しいのだ。
そしてもう一つ断言出来る理由として、暁も全ての力を解放していない、というのがある。
当然の事ながら、脳の機能を解放するというのは危険である。特に子供はまだ身体が出来上がっていないから余計に危険である。無理矢理身体を強化し、普通出せない速度で走るなど尚更。
だから最大限解放というのは、自分で何となくわかる『身体が壊れないギリギリのライン』であり、残念ながらそれは在原隆之介が本気で走って捕まえられる程度のものである。
だからあんな銃も効かない、成人男性を数メートル吹っ飛ばせるそんな化け物が追いつけない、捕えられないわけが無い。
それでもまだ捕まってないのは相手が子供だからと舐めているから、という結論になる。
ならまだつけ入る隙はある。
「おい女、お前アストラル使えるんだったな?」
「ふぇ!?つ、使えます!!」
「どんな能力だ」

「み、水を操れる??そこら辺に水が無くても多少なら空気中の水分を利用して水鉄砲くらいなら??」
「十分だ、次の角を曲がったらアイツの顔面に水をぶちまけろ!!」
その言葉を聞いた瞬間、暁は文字通り全力を出した。
「!子供なのにまだ上がるっていうの!?」
流石に驚いたのかルナドーパントは更にスピードを上げて暁達を追っていく。
そして暁が曲がったのを見届けて、ルナドーパントも曲がった瞬間

「今だ!!」
そんな声と共にルナドーパントの視界を水が覆い尽くした。
流石に突然顔に何かが飛んできて、反射で顔を腕で庇ってしまったルナドーパントは、一瞬とはいえ完全に見失った。
「??なんて坊や達なの!!??嫌いじゃないわ!!」
その一瞬の隙をついて、暁達はルナドーパントから完全に姿を消した。

まあだからと言って逃げきれた訳ではないのだが。

所詮人間の、ましてや子供の全力。
ドーパントからは逃げきれない。
特別なことは何もしていない。ただ跳躍しただけ。
それだけで、あっさりと彼らは見つかって、捕まった。

「――――知らない天井だ??」

そう言って暁は目を覚ました。
何処だかは知らないが、拘束もなく寝かされている、らしい。
「????俺ってあの化け物に捕まったはずじゃあ????」
そもそもなんで俺が捕まってるのか。追われてるのはあの女だったはずなんだが。
「お、目を覚ましたな坊主」
そんな事を考えてると声をかけられた。声のした方を振り向くとそこには、青いメッシュが入った金髪の男がタブレットを操作していた。
「??あれか？誘拐犯の仲間か？」
「大体あってる。すまんな、こんな事に巻き込んで」
「??意外だな、誘拐犯が謝るとは」
「ふん、こっちにも事情があるってことだ」
そう吐き捨てると誘拐犯の仲間はビニール袋からラ〇チパックと烏龍茶を取り出してこちらに投げ渡してきた。
「取り敢えず食え。安心しろ、毒なんか入っちゃいない」
「お、おう??」
なんだこれ。厚遇じゃないか。
いやまあ確かに誘拐だろうとそうじゃなかろうと、人質は簡単には殺せないというのはわかる。だって人質がいるから迂闊に手が出せないし、要求を通せるのだ。
だけど――――俺は本来誘拐されるはずのなかった人間だ。
だとしたら放置なり最悪殺されるなりあると思ってたのだが。
「??安心しろ、少なくとも殺したりはしない。こっちにも事情があるんだ」
「??何、おじさんってエスパー？」
「おじ??!?俺はまだ１６だ!!」
「うっそぉ!?」
いやまあ確かに、そう言われてみれば若い気がする。しなくもない。
けど、だけども。そんな金髪で青メッシュが入ってて如何にも『修

羅場潜りぬけて来ました』みたいな貫禄出してると??あと＋１０は最低でもあると思った。
「まあいい、お前には聞きたいことがあるんだ、在原暁」
「なんで俺の名前を!?」
「企業秘密だ??で、お前に聞きたいことなんだがな」

――――左翔太郎とフィリップって知ってるか？

「??で、暁も誘拐されたと」
「申し訳ない??我が娘を助けてくださったご子息まで巻き込まれてしまうとは??」
「いえいえお気になさらず??しかしなるほど??傭兵部隊ＮＥＶＥＲですか??」
暁と誘拐予告のあった少女、二条院羽月が誘拐された。
そう報告が上がったのはフィリップ達が特班に呼ばれてすぐの事だった。
そして二条院羽月の親を呼ぶ間にフィリップはＮＥＶＥＲの事を知りうる限り全て話した。
念の為、裏付け調査を行ったところ、確かにこの世にも『ＮＥＶＥＲ』という傭兵集団は存在していて、構成員も一人残らず同じであった。
ただ一つ違うのは――――

大道克己が現在十六歳でＮＥＶＥＲを率いてることだ。
十六歳、それは前世の大道克己が死んで、ネクロオーバーとして蘇った歳。
「??そして何より、一番の乖離は彼等『ＮＥＶＥＲ』が正義の傭兵集団として噂になっているという事だ!!??ンンッｗな、なんだこれは??っブフォｗ」
一応訂正しておくが、翔太郎は決して大道克己が正義の傭兵集団として活動してるのが可笑しいとは思っていない。
大道克己はネクロオーバーとして第二の生を受け、財団Ｘの過酷な訓練を受けるまでは善良な人間だったし、所謂『クオークス事件』の時までは、多少なりとも良心が残っていたのだから。
だから、というのも変だが、翔太郎笑っているのは――――
「戦場で暴れる仮面と化け物の集団、しかし決して一人の死者も出さないことから『戦場の天使』と呼ばれ??ブフッｗ天使??ンンッ??」
「何がツボに入ったのかは置いておくとして、僕の仮説を話してもいいかな翔太郎」
「ああ??ッよし、もう大丈夫だ」

「まず、ＮＥＶＥＲ??少なくとも大道克己は僕らと同じ状況にあると言って良いだろう。ここで言う前世の記憶持ち、と言うやつだ。エターナルメモリもロストドライバーも所持しているだろう。??だがそれだと説明がつかない事がある」
「大道克己から残忍さが抜けている事、だろ？」
「うん、概ねその通りだ。彼が僕らと同じ状況なら大道克己には残忍性が残るはずだ。考えられる可能性は二つ。１つ目は転生したことで何らかの心境の変化が起きてそのまま改心した可能性。??これはほぼほぼ無いだろう。そう簡単に起きるものでは無いからね、となると二つ目??つまりこの世界の??言い方はあれだが闇堕ちする前の大道克己が人格の主導権を握っている場合だ」

なるほど、それならば残忍性が無くなっているのも頷ける。だが問題は――――

「??なんで善人の大道克己がこんな事をしてるんだ?」

「それは判断できない??ただこの事件、どう考えても大道克己が主犯とは思えない??この事件、何か裏があると思った方がいいよ翔太郎」

とある男の研究室。

そこにはガイアメモリの製造ラインがあり、今現在も稼働し続けている。

男はパソコンを操作しながらボソリと呟いた

「??が??欲しい??」

第四話：そしてRは覚醒する／ＥＴＥＲＮＡＬ　ｉｓ　Ｂａｃｋ（？）２

大道克己は善良な人間だ。

友を愛し、親を愛し、真っ当に生きてきた。

――十歳の誕生日までは。

その日見た夢は、あまりにもリアルで、確実にそれは自分の体験で。

人を率いて、生きる為に色んな所を渡り歩いて、殺して、殺して、殺して、殺して――

『さあ――地獄を楽しみな』

最後に、自分が甦された。

「思い――出した⁇」

――大道克己の、『風都史上最悪の犯罪者』としての、前世の記憶が、戻った。いつの間にか枕元にはロストドライバーとエターナルメモリが鎮座していた。

だがしかし、彼が変わるかと言えば、別に変わることは無かった。

⁇この場合、彼は変わった方が良かったのかもしれないが。

もう一度言おう。彼は善良な人間だ。

だからこそ、彼は彼等を切り捨てられなかった。
善良だからこそ、彼等を助けなければならないと行動しはじめた。
泉京水を、堂本剛三を、羽原レイカを、芦原賢を。あの島の人々を。
前世のようになった原因を取り除こうと。足掻いた。
放っておけなかったから。

幸いというか前世の縁が答えたのか。何故か場所がわかったので、助けるのはなんの問題もなかった。というかそもそも風都が無いだけで世界がほぼ同じだったから、場所だけでも把握出来たのが大きかった。幸か不幸か、日付も同じだった。
自分の歳だけが少し違うのが何とも言えなかったが。

そして全員を助けて、それで終わり。だと思っていたのに――――

「??何でこうなったんだ???」
自分はただ、見捨てられなくて助けただけで、傭兵としては全く活動する気がなかったのに。
「そんでこんな事になってるんじゃな??」

気がついたら、傭兵の中で都市伝説になってるし、今回はドジを踏んで、犯罪に加担することになってしまった。
胃が、痛い。
「ま、まあいい??京水とあの??えーと、そうだ。暁君だ。暁君の言う事が本当なら、前世の俺を倒した仮面ライダーWが居るはずだ??」
だとしたら、こっちを助けてくれるかもしれない。今はそれに賭けるしかない。問題は――――
「??俺が大道克己って信じてくれるのかなアイツら??」

「??で、指定された場所はここなんだよな?フィリップ」
「その筈だ。気をつけたまえ、いくら善人と謂われていても、大道克己は誘拐の実行犯だ」
「ああ、わかってる??」
あの後、犯人の居場所を暁の持っていたケータイから、何故か大道克己がメールを打ってきた。

『仮面ライダーWへ
橘花総合病院跡地に二人だけでこい』
そんな内容だった。
なので来たのだが――――
「??あれがあの大道克己?」
確かに、髪の毛の配色は紛れもなく前世の大道克己だ。
背丈やら年相応の顔つきやらなんやらは前世が年齢と一致していないから仕方ないとして。

「??さあ、地獄を楽しみな!!??違うな、前の俺はもっとこう??さあ、地獄を楽しみなぁ!!??なんか違うんだよなぁ??」
「??あんな可愛らしい行動をする辺り、恐らくNEVERとなる前の精神状態と見て良いだろうね。やはり黒幕は別に居る可能性が高い」
「それよりもあれに話しかけるの?すげえいたたまれないんだけど

??」

あまりにもあまりなシーンに出くわして話しかけるのを躊躇っていると、話し声に気づいたのか、ぐるっ！と勢いよくこちらに首を回してきた、が。

「?????なんだ、ガキか。おい、ここは危ないから早く親御さんのところに帰りな」

「お前が呼び出したんだろうが大道!!」

「??は????」

まあ??当たり前の反応と言えば当たり前なのだが。今のフィリップと翔太郎は１０行くか行かないかの子供の身体なのだから。

「??いやいや、え、嘘だろ？齢１桁台???マジで???」

「おーい？」

「??確かめるしかないか??」

ブツブツ言っている大道克己（推定）に話しかけるも、反応は芳しくなかった。が。

「??お前ら本当に仮面ライダーWなんだな？」

そう返してきた。なので、翔太郎達はコクリと頷く。

「??本当に仮面ライダーWと言うならば、それを証明してみろ!!」

大道克己は突然そう叫ぶとロストドライバーを装着した。

「いやなんでそうなる!?」

「うるせぇ!!まさかそのレベルでガキとは思ってなかったんだよ!!あと実力も試させてもらうからな!!」

『エターナル』

「変身!!」

『エターナル』

今一度、翔太郎とフィリップの目の前に。

仮面ライダーエターナルに変身した大道克己が立ちはだかった。